目次

一、卯辰紀行（笈の小文）抄……三

一、奥の細道……八

一、幻住庵の記……六六

口絵写眞　杉風刻芭蕉翁木像・芭蕉庵・採茶庵位置図・三山の句短冊・曾良自筆奥の細道随行日記と自画賛

主要挿絵　素龍清書本巻頭影印・野を横にの短冊・白河関碑・文字摺石・医王寺の石碑・実方古墳・多賀城碑文・文治寄進の燈籠・松島雄島碑・瑞巌寺・平泉旧跡現状対照図・中尊寺その他・立石寺と開山像及び蟬塚・出羽三山地図・実盛塚と甲・願状・那谷寺・永平寺・気比神宮と種の浜及び本隆寺・猿蓑幻住庵の記巻頭影印・幻住庵古跡図・一如僧正筆扁額

巻末地図　奥の細道足跡地図

卯辰紀行（笈の小文）抄

百骸九竅の中に物あり、かりに名付けて風羅坊といふ。誠に羅のかぜに破れやすからん事をいふにやあらむ。かれ狂句を好むこと久し。終に生涯のはかりごととなす。

ある時は倦んで放擲せん事をおもひ、ある時はすゝんで人にかたむ事をほこり、是非胸中にたゝかうて、是れが爲に身安からず。しばらく身を立てむ事をねがへども、これが爲にさへられ、暫らく學んで愚を曉らん事をおもへども、是れが爲に破られ、つひに無能無藝にして只此の一筋に繋がる。西行の和哥における、宗祇の連哥における、雪舟の繪における、利休が茶における、其の貫道する物は一なり。しかも風雅における、其の山水画。（八）千宗易。豊臣秀吉に仕え譴せられ、永正十九年最後の茶の湯を催して自刎した。（七〇才）

（一）貞享四（卯）年五（辰）年の両年にわたる旅行の紀行（貞享五年は九月改元、元禄元年）。（二）宝永六年に更科紀行を付録してこの名で刊行せられた。（元来は芭蕉が書き留めていた俳諧集の名であった。）（三）荘子の語、竅は穴。（四）甲子吟行「狂句風の身は竹斎に似たる哉」（五）歌僧。俗名佐藤義（のり）清。左兵衛尉、鳥羽上皇に近侍、保延元年出家、建久元年寂。（七三才）家集「山家集」。（六）連歌師。心敬等に学ぶ。「新撰菟玖波集」撰。東西に行脚し文亀二年箱根湯本に没（八二才）等揚雪舟。永正三年寂（八七才）。その（七）千宗易。豊臣秀吉に仕え譴せられ、永正十九年最後の茶の湯を催して自刎した。（七〇才）

月日は百代の過客にして、行きかふ年も亦旅人なり。舟の上に生涯を
うかべ馬の口とらへて老を迎ふる者は、日々旅にして旅を栖とす。古人
も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて
漂泊の思ひやまず、海濱にさすらへ、去年の秋江上の破屋に蜘蛛の古巣
を拂ひてやゝ年も暮れ、春立てる霞みの空に白川の關越えんと、そゞろ
神の物につきて心を狂はせ、道祖神の招きにあひて取る物手につかず、
股引の破れをつゞり、笠の緒付けかへて、三里に灸すうるより、松島の
月まづ心にかゝりて、住める方は人に讓り、杉風が別墅に移るに、

板屋筒井　本書清龍素

奥の細道

（一）推敲を重ねて元禄七年初稿に至って定稿を得たも元禄七年のであろう。素龍清書本を元禄十五年井筒屋重行の桃青本、元禄八年板行の桃青本などがある。

（二）李白の「春夜諸弟と桃李の園に宴する序」の初めに「夫れ天地は万物の逆旅、光陰は百代の過客にして」（唐文粋）

（三）西行は河内、宗祇は箱根、杜甫は洞庭湖畔、李白は潯陽で客死。

（四）芭蕉の元禄二年二月ごろの手紙や杉風の三月の詠草によれば、芭蕉は三月節句過ぎに出発して三月の内に白川を過ぎて松島・塩竈まで予定でゆく予定であったのを、白川から余寒が厳しいという知らせがあって出発を三月の末まで延期した。ここはその予定の方。

（五）下の「狂はせ」に係る副詞。そぞろ神という用語例はない。

（六）杉山氏、名は元雅、のち一元。通称鯉屋市兵衛、日本橋小田原町住、魚問屋、幕府の魚御用、芭蕉の早期からの門人。享保十七年没、享年八六。

（七）控茶（サイダ）庵。深川元木場平野町にあったらしい。